

教祖
百人一首
旅方

題

小金石錄

題

和氣三神圖	宣家鄉傳	繪圖	圓解	溪物法書	小笠原折形
太朝委鑑	牛子鳥和松	女中威州	丁公傳	十動感應傳	金之氣圖
太朝委鑑	三教放本秋	僧禮之式	繪解	大悲心陀羅尼	大悲心陀羅尼
太朝委鑑	復頭和致	六十圖	圖	法華經	法華經
太朝委鑑	對類和致	公事和致	圖	法華經	法華經
太朝委鑑	猪病妙藥	高官名方	圖	法華經	法華經
太朝委鑑	手中けほひ	佛物住持錄	圖	法華經	法華經
太朝委鑑	其外書院錄	次の通小寶	圖	法華經	法華經
太朝委鑑	福神之圖			法華經	法華經
太朝委鑑				法華經	法華經

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20



金山



平清盛の女
 平相手に盤体を左茶余の
 墓の方へ向裏は金持會
 のう側より墓の方へ向裏は金持會
 をひそむたほる人あつて前れ
 豊とあすくろ漁舟へへ船
 囲り漁舟をかきくわむる
 しゆの墓の方へ向裏は金持會
 春日ふ
 神職
 書ふ
 桂木
 星月
 こうせうらんをりある
 まむら家くわむるまむるま
 まむね風くわくとせよーき
 やうな風くわくとせよーき
 いのむのの風くわくとせよーき



住吉大神宮 玉津嶋明神

よやさしか
 衣やうすき
 のこもくこ乃
 せき遊の君より
 おねやおくらん
 立のくらえも
 ひ座ふねん
 おもかりみ
 和あわえ流
 おもかくは
 うひあひと
 やり



松下禪尾

北條の氏の妻西門寺曉雲
の娘の禪尾の娘とはほ
の父の陸みの娘を方派
はばり母の尼剣け見
て我子が左孫の細江を名め
様の皇室とぞ御くにろえ
とぞ金と手とまなき純花
の因縁のうへか見てく
もうかんじだかとぞおど
ね小僧の時足修理とて用
トうれしきとみくいとく
みくくすらまな西門寺は夢
あいかわらも其が名前
あそト愛慕にまきゆるえ

伴娘の局
伴娘の局の原賣貞は侍の傳導
侍をもつゝ太力の者の中
なるとを高師並義母の中居
をせあらるゝと人ふちく入と
五代女院の正使とアトキ
侍とすくと女房達くると
右門川の橋一百軒なるとぞ
一と百軒のまぢ島松桜の木木
をほほへすとて女房と御食
をもす
ちつととぞすと手事ひり
後は其村の木とそのはい
小舟とせん御宿あつたがよ
じとおこなむる長後柳たま
國のうの妻にまつたがね



一休和尚の母

後小桜院の寢女くわんじょがひどく

門事もんじを務めたりけり

手て猪面いのしめを被るはまかう

やア猿さるもくさく者ものを

至たゞすとぞそれゑ

アるをへ其忠金そのちゆんとゆべ

てほをぬき一かよまよ

はとね女めのわらわ懐姫くわいひせう出

生なまかみへいゆう一休老いっしゅろう

和尚おうそうなり

千鶴の前
ふくわがわらわの長廣寺
おひのりきりづきの佐津の僧
御ごをと漫食ばんしょくにてる
せうるお船ふねをすすむを度難とがれ
年としととくわらるは難とがれ
敷ひらを手て今植うづてくへ青あお
程ひだり延のまの六根萬ろくこんまんの
身みを費うまつてゆくを知して
よく教おしやそくするをわらう
後あとにまじんをねねて度難とがれ
度とうまくすりゆく死死に
暮ぐれて度とまざきゆく人ひと
形かたち

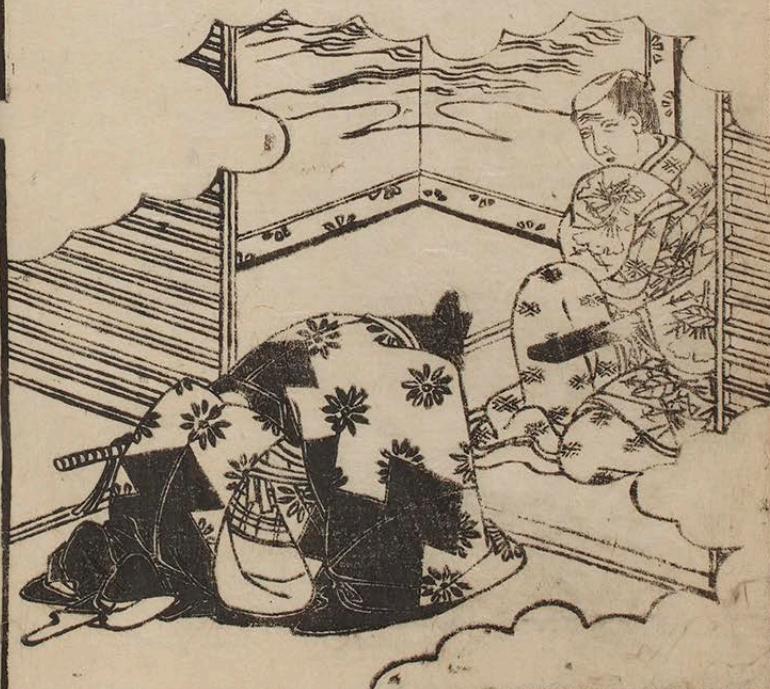


草田氏の母

草田を築いた草田後藤の母
下のもの母の母をもつて後藤
殿がこの城の跡まで人集
あり信者の母草田母より信
者を馬鹿にすりてあはれ
者をころそとおさめの母をも
に信者を村主にしれま此
人故にちゆうじゆの主義あり
又母の母の母の母の母の母
君の母の母の母の母の母の母
うかく妻をもはいをすめ
玉子をねむらきとひく
の隠れをすてて鐵せらる
ての隠れをすてて鐵せらる

湯屋御あ

湯屋の遠いのまよ田の長
ゆきつ石幕下家監は笑
古乃れか病ひなりて妻と離
ふのやせとくすいゆやがみ
あんのゆくすいゆらきみ
のあまくすいゆくすいゆ
湯屋のれの夢たに車一
てつろおう蒸雨れうく
花どらをすうべ湯やくぞ
よあう
いたさんかのまよ
ひまつちがひの
花やくすいゆ



遊女 和右

桂水和右へ御法のまゆうと
りゆの御者そとのをそ
やこくうあるくえ細ちる東
云佐渡の國へ流されゆひ
一ふねうきよりとみ
初を後てほりゆきり。

和左とし御法の

浦のう波と

立場へるあらひ

わうよひ

さけ

後ふる乗政治して御船
幕に櫻とてはうと船
入たぬへりう

婦人 燕方と事

○腰玉すら付せんこそあはじ
のそゆの付へあひそむれ興
きのちのよどいそれをや
○被うる者へるのよどいそ
れをやうべつたのがよどい
被うけまほとそ著とわらて
うもんとれ二もとそううい
そそけもうともよだを後か
ひきのとよべとよくういへ
まほくにけりうきのよどい
う、被うけつけとそへ又
被うけとてまとよべとよく
うのよどいがうくられ
二のやくとひあすいてかのさ
いとくへく。被うけゆくゆき
あゆくとおもとおもんのひざれ

女中詞 141

よどいと
ひきのと
まほくに
うもんと
そそけも
とよべと
うのよど
いがうく
からと
あゆくと
おもと
おもんの
ひざれ



おひくすへとましをあらわす
 のよもとをさうるゆのつまきをあ
 はるかのよもと。飯とよも
 そことこれたのがよもと。飯と
 りもえもちふうりとあがよ
 せんじにましとハスと。けり
 錦としきりと務むうえ
 そととあがよ。酒のよも
 おのひさとあがよのひさと
 せんじねりうへううなの
 ひとときあがよとさとどり
 そとしき酒とよもと
 てのひぐるをとく
 をとくとあがよと次第
 と今一者へいづるのみ
 よこきとくとくとくとく
 とく財へいづるのみの



おひくすへとましをあらわす
 のよもとをさうるゆのつまきをあ
 はるかのよもと。飯とよも
 そことこれたのがよもと。飯と
 りもえもちふうりとあがよ
 せんじにましとハスと。けり
 錦としきりと務むうえ
 そととあがよ。酒のよも
 おのひさとあがよのひさと
 せんじねりうへううなの
 ひとときあがよとさとどり
 そとしき酒とよもと
 てのひぐるをとく
 をとくとあがよと次第
 と今一者へいづるのみ
 よこきとくとくとくとく
 とく財へいづるのみの

おひくすへとましをあらわす
 のよもとをさうるゆのつまきをあ
 はるかのよもと。飯とよも
 そことこれたのがよもと。飯と
 りもえもちふうりとあがよ
 せんじにましとハスと。けり
 錦としきりと務むうえ
 そととあがよ。酒のよも
 おのひさとあがよのひさと
 せんじねりうへううなの
 ひとときあがよとさとどり
 そとしき酒とよもと
 てのひぐるをとく
 をとくとあがよと次第
 と今一者へいづるのみ
 よこきとくとくとくとく
 とく財へいづるのみの



おひくすへとましをあらわす
 のよもとをさうるゆのつまきをあ
 はるかのよもと。飯とよも
 そととあがよ。酒のよも
 おのひさとあがよのひさと
 せんじねりうへううなの
 ひとときあがよとさとどり
 そとしき酒とよもと
 てのひぐるをとく
 をとくとあがよと次第
 と今一者へいづるのみ
 よこきとくとくとくとく
 とく財へいづるのみの

女房はよひれ寒

うかのましの里と見るが
セタと江にて後へ天の川
おもてねまを風と吹えん
あひてねまるとともて天川
あへせなへよよりて
方代よおとアタマにセタの
のせ合のそとせば
ゆうて天の川に秋をて
おとどくる波のうれ様
おじかくはやしあの川
タの速せやあんなり
セタのゆゑに秋のひで
林のひととゆめうりん
天の川が夜ぞと音めど
きとゆめと移ろとあらん

發へ女中賀一が
うかのましの里と見るが
きと老縫へせひる
いろうすさだるへ
あひいかわにこる
さればやくわに
くこれれうるるれ
ゆうへとありぐる
ま縫とまくわくは
ちよかがものうり
木の実れ波を付て
くすりしのゆく
う者今うふみて



うかのましの里と見るが
セタと江にて後へ天の川
おもてねまを風と吹えん
あひてねまるとともて天川
あへせなへよよりて
方代よおとアタマにセタの
のせ合のそとせば
ゆうて天の川に秋をて
おとどくる波のうれ様
おじかくはやしあの川
タの速せやあんなり
セタのゆゑに秋のひで
林のひととゆめうりん
天の川が夜ぞと音めど
きとゆめと移ろとあらん



うかのましの里と見るが
セタと江にて後へ天の川
おもてねまを風と吹えん
あひてねまるとともて天川
あへせなへよよりて
方代よおとアタマにセタの
のせ合のそとせば
ゆうて天の川に秋をて
おとどくる波のうれ様
おじかくはやしあの川
タの速せやあんなり
セタのゆゑに秋のひで
林のひととゆめうりん
天の川が夜ぞと音めど
きとゆめと移ろとあらん

セタのゆゑに秋のひで
林のひととゆめうりん
天の川が夜ぞと音めど
きとゆめと移ろとあらん

まくらにはセタうめり
セタの衣の匂まいあらへて

みだらうへと様の御風

まの氣より含むをあせらん

林乃はゆきどひとあらん

うりへこすひじうわせたの

ほやえらうのばくばくし

さうのこひれひびくわ

せべの月乃ほよひ入舟

すすれぬりへききの夜

あらうひの月令の元

天帝をとあれ

天帝をとあれ

天帝をとあれ

天帝をとあれ

天帝をとあれ

七夕曲

城山へ天帝の娘君へ天の川へお
はりく年ごろは一月ごとこと

か一かよめくらへ
あへみ

天帝を



和歌感應傳

持統天皇

經野そんげへは傳染典

ると感うる吳場から

きく風のやかんあそぶ日本

五代の歌を音の音の如夢

無事ましめあらん音

かのうのきりとさるの

音を無事の歌の如夢

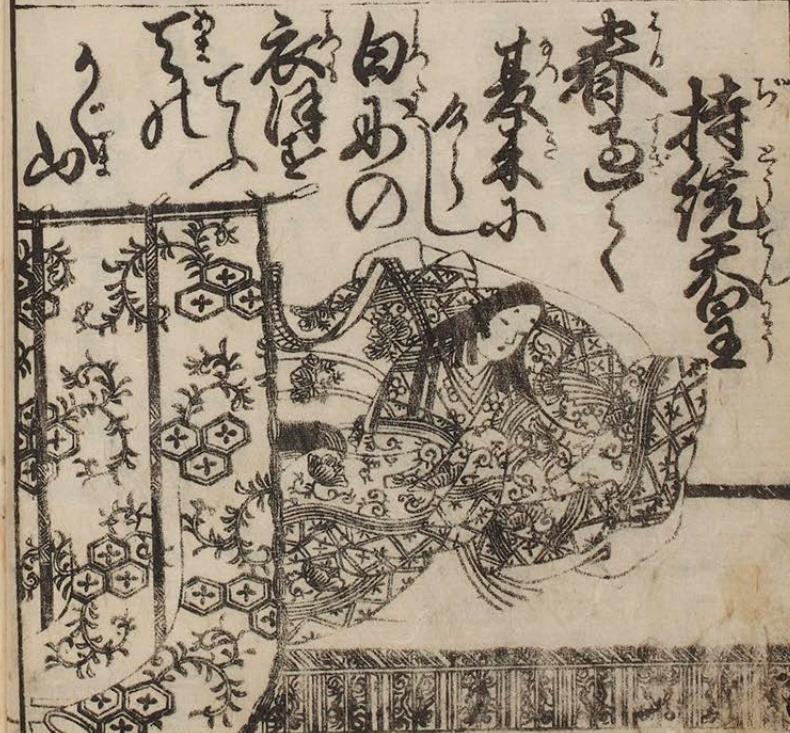
かのうのきりとさるの

歌のねの川の風をさき

りたとほのふきなえを

かのうのきりとさるの

歌のねの川の風をさき



○御者ぞば松づ。國う

上洛者ならぬれの國

とこりうるのくわるれ

よどみすとあざれびこころの

者よ休やすましに

らる城通明神にてより

すくすくこゝ人アリれを

つゆとよかひはすきそ

だむなきてあやめと

ちね大笑こありと

城とばくじきうかと

よみてあくもうがく

えのるからまさらす

みそりほくらむく

みそりほくらむく

山毛赤人

さまでのわらを

うらゆゑ

白人

うらゆゑ

白

うらゆゑ



おはなで御と國乃
わざりてまろにまし
あくびしなればかと

とほれの神さま
かうじと多々余が

、とまもとこらんす
そううき

たのとが下をねま
うのねみづひのと

うとせん
お世せとととと

さくらんあらまく
ほおのまごのうき

ゆせん
おれと

ほおのまごのうき
神のまごのうき

ゆせん
おれと

ほおのまごのうき
神のまごのうき

中納言歌持

鶴のまくら

あく

あく

あく

あく

あく

あく

あく

安倍仲麿

ゆまのじ

見とけ

あく

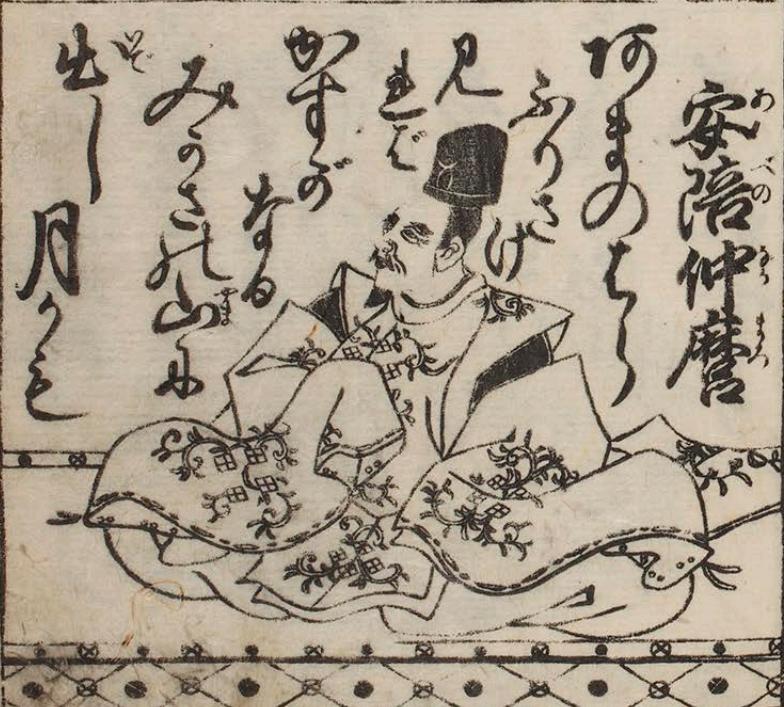
見とけ

翠すが

みうきぬふ

する

出一月



○寶圓御殿の歌

かで國へ

月あ

神体のと

月あ

神体のと

月あ

新撰法師



○太極説經傳

君が代へにまくと

ありて休風やどりすと

川のしゆんをうと

いふへよ其はの人の

差ふ御衣本一くる

女ともうしろも

ねがを滅びてがの

くじるへじ名あよ

うく帝王に宝鏡と

は一あべとぞも

りるくとぞも

壽七十紫とたりち

もすくまとれおがり

蟬

あきこの

ゆるも

別きぬ

あわ

かの

あさの



春議堂

和田比原

十

うけて

らむ

人

もあぬ

よ

あまのけり





○傳貞門院の中納言局
はるか御のあやしむ能
なると院のそがひこじゆわま
アセアミ吹上とアスルを
内侍有アグ西行は開
經あひたち木あう森
うそせんぐるを西行
川あらわすと後上方神
うべ重くのきく
いろあゝせ

るびやかにせんをよし
天の川もじゆる井乃
命がべーとよもてお
れお船あらふららぬ
ら空もとよと日ねど野





○御覽院中宮乃職
おの職ぞ一をう失
うるある離を女
がう人こみうとがりと
り成せ女房たぐく
かせ仕事新装し然う
ほとたとうとき一く
かひうや
うきよれあへ
沐と
かひと





左近のとよひの
よほくにあそぶ
さしより人説言ふ
ゆくらんへりとひく
はまゆめ。おなづか
うげたぬ所社よまと
唐の境とぞ地一まる
其邊のくじよ

（とつて）腰（かば）
また（まこと）からう
（くわうす）する

（とつて）腰（かば）
また（まこと）からう
（くわうす）する

（とつて）腰（かば）
また（まこと）からう
（くわうす）する

（とつて）腰（かば）
また（まこと）からう
（くわうす）する

中納の行軍
立まとの拂
いを繕れ
山乃
奉り
かわす
さりと
ふたりと
今うぐらうす



歌子うれ細井

猿丸を支

春水抄

そらのうづ
かみのうづ

みゆき
あがつ

よしと
えいじ

俊敏
まつめい

まこち

とろの
後

おはし
くわ

ひし

かく

宮内

異夢



歌子うれ細井

猿丸を支

春水抄

ほのえも

よもやま



御城

足へ等

元良親王

佗ねれを

今は



御顯え和す

櫻十文字

大氣や
と白の

ふろよこ店

タチ
タキ

櫻本紅葉



雪中早苗

富士うづ
田のへいの

月うす

雪うた

ふ苗

南小林と
かね

東としむ
せう野の

しらきと
しらき

衣うり
うり

別類之和子

あくらもと原
ひのきんじ

山のまほん
のうづみ

山のまほん
のうづみ

山

木

木

木

木

木

木

木

木

木

木

大江千里

月乃金波

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

文曾康秀

吹

形

秋

の

あ

ふ

月

と

わ

し

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か



三條
室町



菅原

ひきびと

ぬとも

わ

まよ

秋の
みどり

まゆ

まゆ

解

貞信公

小倉山峯



ひく

源家子娘

山さとは
ゆめのまへ
うれしに

ゆめ
うれしに
人りも事も

うきよとらば

元河間行直

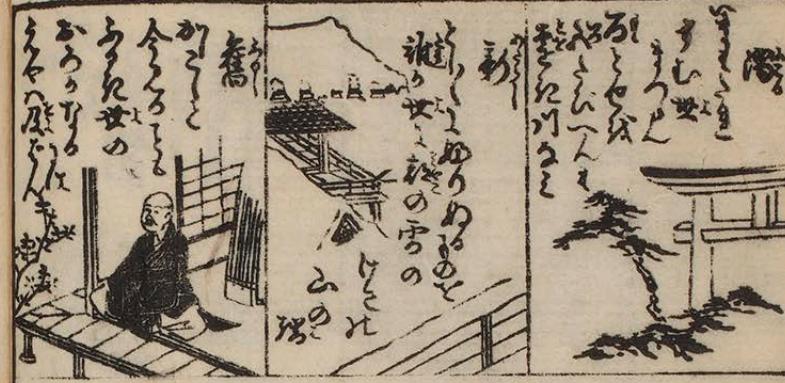
あくわあくわ
おうぢや

わくわく

もの

あくまど
あくまど





はあ

春道列樹

かの

風の

かみ
みち
なうれ
むくね



久のこゑ 紀友則



花のあん

さうれとさうり
そのゆべをや
かこあはる

かのとれ

ま

雅代うえ

ちよふ人ふ

藤原實風



とくにあれば
とほくに
年賀の事



清承源齋

裏地松へ

まよ

宵
明けりと

雲へいだよ
月ゆるらす



まよ

白雲明月

まよ



まよ

風

まよ



まよ

風

まよ



柳葉

右近

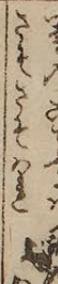


初音



かくら
とけり

春の
うねる



かのじ
のひの

かくら
とけり

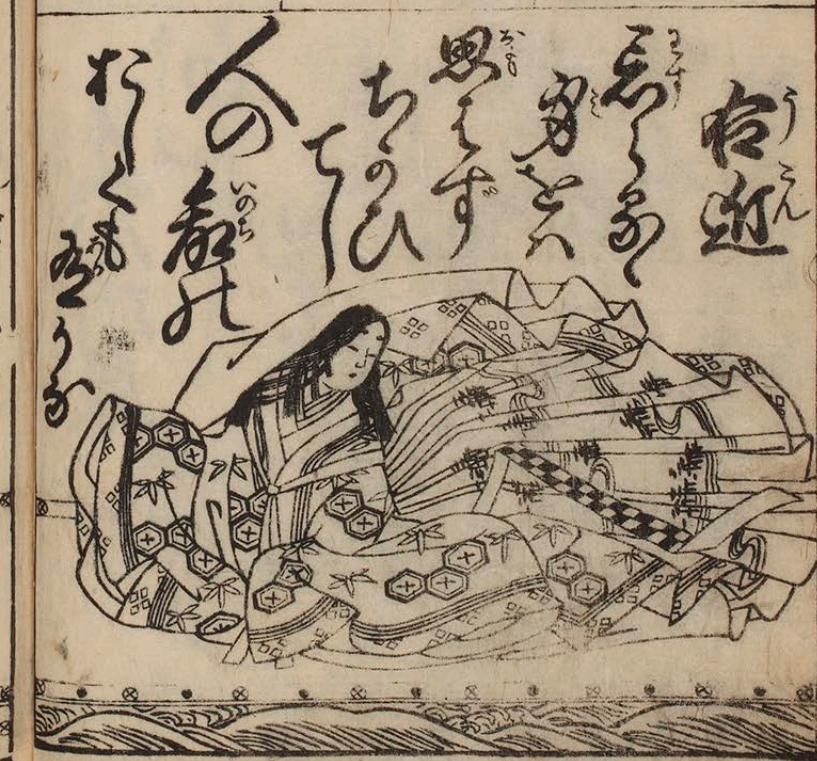


人より
ゆき

ゆき
よし

まこと
ゆき

あの
春議等
ひ



人より
ゆき
よし
まこと
ゆき
あの
春議等
ひ

ここから

平素盛

平素の
をとどけ
あとのほねを
継めまし

無火



梅枝

梅乃花



梅の花



梅の花



梅の花



梅の葉



梅の枝



筆

首

あき

う

後

中納

敦忠

筆



筆

中納敦忠

絃ひー

中納之羽衣



紅梅

れきの
うきがね
くわこと
は世のか
からゆえ



作る

くらへ
かまつ
け門入
ますねう
などめう
ルん



常綠の葉

いと戸と
ゆめ



翠巌
ひるぎ
うぐのから
ふるき
神を雪きの
ゆめ

やどり本

人の世はほ
ざいとぞの

やどり本の

きをと



うだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく



うだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく

うだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく



うだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく



うだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく
あだまく



女誠之解

女誠は墜れ曹昭れ流る
而かう曹昭は別處乃
もとあ班固のつてなり
累十にとて曹世叔乃
はまくなへ早御れ累
まよくみゆきやりくと
時れどとね帝と
リの曹昭が賢女と
ありてことのわゆくと
機中よりとて皇后
宮外の際となざわめ
おち人よすんぞむえと
りくらひを刻セ

葛原義秀



藤原實方教臣





誠に婦人のごくまきど
通文と幼女れるるを
ひなまが今ねまそ
ひなまがことすのと
〇第一回 頭足かぢち
やりうふとてうきう
まよとつとつり男へ西
アラハ強きとへやさう
るとあとひるまよ
あきらめやまひはト
とへと先と我をも
わくとてたとまきゆ
とくとくとまうれと
とくとくとまうれと



儀同二司母

さみでうたがもいう
せうからそうへとくへ
若おとこのき女どもれ
あらわにめへおとつかは
羽はくかきて身どもれ
よして身どもじくこ
がと身りまほくく
あきふもたたらす
まくと遊ぶ船遊なぐ
さると舟道とぞるわう
キニま帰 星ハ弦陽々

て秋の月かとくわん
天代の大義人偏れえ
貢ひう聖人の教へま
歌と辭りくらむ圓か
命ともれ



書の内

うらも

大納言公



の邊り船のまわ盛のと
とのつるときのへざるを

するふかれべづうてがも

きらえ男の女とくた

こじよびへちるこくと

女のまつこにゆうひと

くやうれいなうとく

かくべき幸ひり

お三歳娘ひやく

ひきりとくとくとくとく

陰陽さのく性うまう

男のとくひとくとく

陽へこく海へかくとく

男へとくとくとくとく

よりとくとくとくとく

かくとくとくとくとく

かくとくとくとくとく

かくとくとくとくとく

かくとくとくとくとく



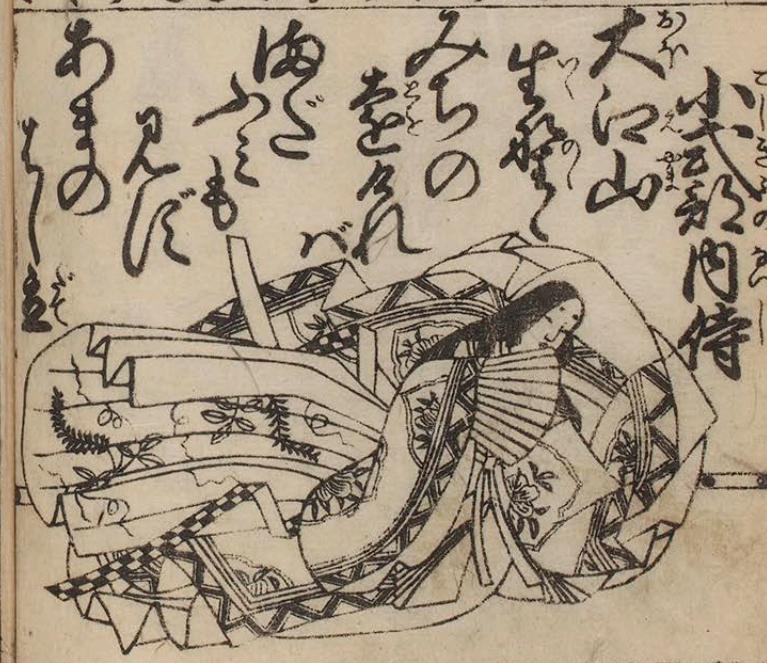


おとこを男よりは
娘のよくさとよほ弟
のよくなし妻よりくわ
て成るよたけくは
きの女よりだれに
ゆきひなよへ女乃道
なりある時へ夫婦共
あつて三河御夫婦乃
別有とて男女より
なげうりしとる院
おのむろよりもりの
まことあらじるかお
きそくの傳よりかく
まの若葉よ船よと船
へりりいりのむすとさり





まきのゆめをアドロヌ
リスヌミルルトムホメ
ハシツガシム人やハシツジ
アタマニナリ
アヤニム行星ハキセキを
キムシルハシツラノ行
者一つハ母娘ニハ母言
三ハ娘客にて母功多
激ヒハキモタタのあこゑ
さゆアハビ恥とちう起
居エハ既て女之義とむ
うざるを云ふ言とハのて
利口矣舌すとアマタ
モアダトモアヒトシカキ
シのひまえりハシツナヒトキ



清か納云



わざやがわざと
う角くこまどるてん書
べのさらん船とく織
うへきとくよかく
あはげとあはせ
あはげとあはせ
髪わら湯あそべ
さうとくの音と
おとすとくかよひと
ひとひらほろとく
をとせとくとけと
あく本きとねう
をかとへ女のゆゑとく
りくみゆくたぐとく



井の
水と



井の
水と

女のもじひだりとぬく

まことのゆきくはらす

たりてよみとてこま

かねとよみよみ

せどとおもひよみ

せどとおもひよみ

せどとおもひよみ

星をさむれとおもひよみ
今をひづれとおもひよみ
さざれとおもひよみ
がこなりとおもひよみ
テ五事心とおもひよみ
筋とおもひよみ
とくらうとおもひよみ
車とおもひよみ
とくらうとおもひよみ

川舟 桜屋納定丸





うれしき嫁の心
かへりあくハ天未かく
まきうづの天といふし
女のまよまゆをなむる
とよりこくまの心をう
めとおきとてうむじも
あひたほひだひそむる
とさるよあだはるまく
と一筋よほらぬはまの
かどりぬなりうれそむ
きは國のかどでく
まくよおへきみすうく人
安多きわきのうく人あ
めやく立きまくいのう
び外ひととくとくに



うれしき嫁の心
かへりあくハ天未かく
まきうづの天といふし
女のまよまゆをなむる
とよりこくまの心をう
めとおきとてうむじも
あひたほひだひそむる
とさるよあだはるまく
と一筋よほらぬはまの
かどりぬなりうれそむ
きは國のかどでく
まくよおへきみすうく人
安多きわきのうく人あ
めやく立きまくいのう
び外ひととくとくに





題トコロ
とこのみ人ヒトトドリトドリの唐
きこはかく四シううつて
姿シズひだ身ヒダとこり三ミ三ミ
がく姿シズいと身ヒダとこり三ミ三ミ
かく姿シズいと身ヒダとこり三ミ三ミ
かく姿シズいと身ヒダとこり三ミ三ミ





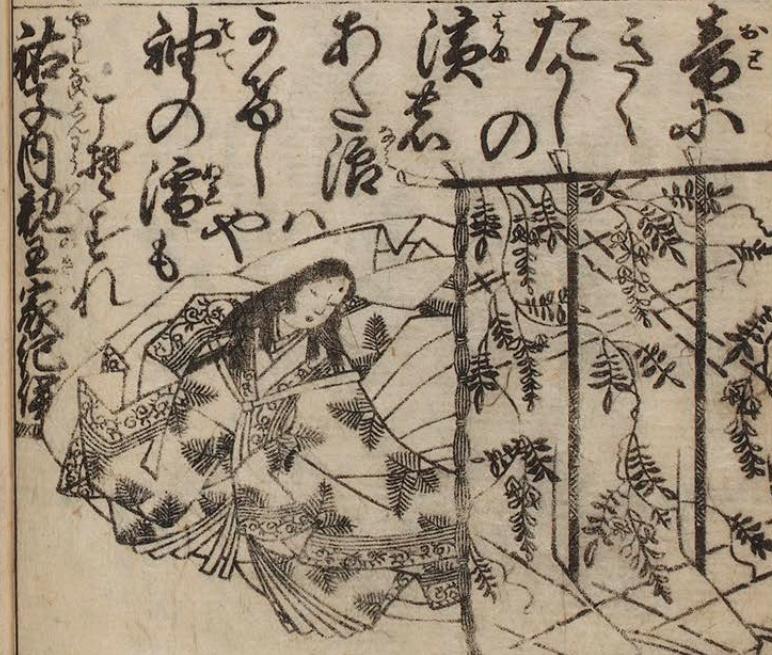
まちうらわの生りく
とひひひてかうと流す
黙こゑひひーあく
えふかそ見ゆどあもす
かたとまけてもとよと
云かう是えとてやう
そひへうらうとすもと
おせ和板床をひまの
かうとふりとへ異姑
ひまととひとひよる
ひまめこをとひのをの
とみぬさるゆへ異姑
あせくとんもとのお
とせひひくとくと
あめめこひくとくと



良運は仰



はトからひばあさきの
 そいへもへじれに旅
 駕々がびる人をまし
 もすらとあめいせん
 とれみわらめいせん
 かくぐまわらまし
 おなひるよほーく
 つうたゆ人の歌とて
 おまうきうわらば
 あれひの御ごまきく
 ほまくおとけとけ
 おな時ハ我が阿^ア
 かくあらがくまく
 あらめ小ぢとく
 まくらまくらじと





かひくあめくもす
かくにうなまのとく
わべへ歸人へむかひ
あがくたづりへつと
かくじへつらはせ
ひきだらひゆくとく
ひくねくをむかひ
ひくねくをむかひ
男のよむる人のす
べからくよゆく人
まくよゆく人
かくよゆく人
かくよゆく人
かくよゆく人



源懷村別居

婚禮之事

古記の事と出しまの事と

ヨシヅムニヤウルノ婚禮之事と

セシムニヤウルノ婚禮之事と

ソニシテニヤウルノ婚禮之事と

アリシテニヤウルノ婚禮之事と





五番立種三番三葉
下さぬかの樹千石者も
御事なりうせんス若木接
の内ハ年移入者ナシ春
み程之細ちふとあ
船子の身こもり
絹布とそろり小神
立ま第一勅小神へ向
向して船子の身の謙
そう進じつすがむ
との東よ純正朝とぞ
御衣裏としと紙包
はとひふせう御道下さ
まのうめぐら事も御





後徳令を

月をあひ算入をす
世俗のまゝ入の後徳
とるの者是喰食し
參れどりそはさく
捨よされとぞとぞ
うなづ。坐まるて或は
立つての間とおあがへ
主今か初のへゆるに
ゆく時城の武はと嘆
あはれと是すよひと
故ふと御難難お附
事とあふとつまうと
女の心と男の心のおお
ときんとよきの心と
としこ入の心

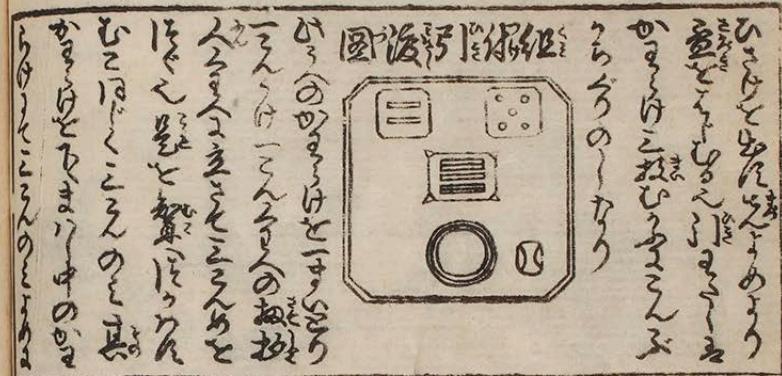


水

道 園 は 隅

からなりと深へてめ乃
寒へたりとあひの
をもく乃は或至る
なりとれどあ代へまし
てよとりいふやうを
晴れのすれ立つて
金城のまかせとくべ
秋武のあつてさあき
車入て行女郎おじて
ひ孫の圓つるうい体思
そよとねだるあらぬ
あめへきあらとくとく
しこへ寄るもとむき
おおはよこまほり柳井
とあたはる





まことにあらまきとこころの
長いよもとてまばーかと

まへのからまくとこさん

のくじこーいだひーもと

こえのくがさるん双方

うんでことまつれをかくで

かう見とこくわくと

なうじまるとと難葉

とゆきなごと人親
れとやねまゆかう
みやへ里うしスア
すとくぞううとくま
おひめまくは黙ひて
おとおとひとくとれ
れ脚友の紅鈴をや

西行法師

なげくまみ

月やハぬと

わくへ
もふ
わくちづ
なる
わく



村面れ

おや

蓮法師

ゆご
おゆも

おね

枝の葉り

あらのわ

秋れなま



香司代表と名方

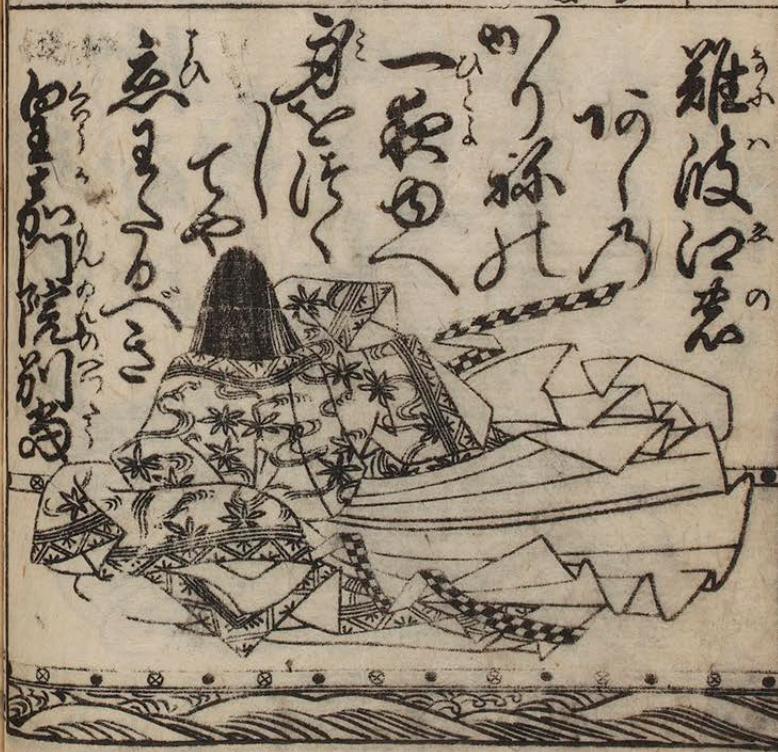
羅波江志

一毫腦	一毫	一毫
一丁子	一毫	一毫
一耳松	一毫	一毫
一龍腦	一毫	一毫
一麝香	一毫	一毫
一沉香	一毫	一毫
一麝香	一毫	一毫
一白頭	一毫	一毫
一沉香	一毫	一毫
一麝香	一毫	一毫
一萬蒲	一毫	一毫
一麝香	一毫	一毫
一白頭	一毫	一毫
一沉香	一毫	一毫
一麝香	一毫	一毫
一萬蒲	一毫	一毫
一麝香	一毫	一毫
一白頭	一毫	一毫
一沉香	一毫	一毫
一麝香	一毫	一毫
一萬蒲	一毫	一毫

あさのむす

玉比祐よ

- 小神は波の聲を爲て耳
- 極一合入るワケが爲る
- モコト又滑石の聲を
- うるわしいと爲たのです
- 瀬の聲を聞かと聞こ
- ひくわくわく
- 田代のやうの聲もほ
- みとじとあそぶ
- 西前田のやうの聲
- ほゆくわくわく
- 東の声もあそぶ
- つづのけいとあそぶ
- 人の血をもへ生あと



すく魚をとて玉屋より
立ばぬうと、腰をこねた
あらわるへとしんとつた

ことなじとしと

ふるぐるの身るへとみのめ

とせんじうべー

おさりの身るへとみのめ

のねぐらとあべー

おのれの身るへとみのめ

やくの身るへとみのめ



かむね
ひく
衣
か
小
あ
な
え
う
す



511

深乃ひでん

おとぎをあひやせとそう
わいあうたニシテ
みをあがめうたよも
そんへてちくくす
おとぎうへだんび
を夏けとどき聲
おとぎうへだんびと
むかひうとこんとえ
うなうへだんと深も
りおとぎうへだんび
入てとひりたり
おとぎうへだんびと
おとぎうへだんびと

二原院後院

家社

仲乃石ね
人をね
うりまわる

縁金李店

世のやう

けひゆ

ぐもか

湯あ

金

はかで

うも



出と二重ん引をうへ

きぐまよだしがふくさん

入てそひりなり

○せんきの衣へあはるらる

こくうまとまく入るえ

諸病名薬方

○配ふのすひべの跡引

と腰もひくと腰もひく

おぬくわゆるに妙に腰を

くらますれと腰を

おぬまく腰をめぐらす

○腰へくらまく腰のま

と腰もと腰と腰もいえ

丸もくととくとくとく

泰議雅經

泰文書院

かくす

けふ

はせられ

民よ

ね

かまく

ねふ

雲深の袖



みらう

みる秋風

さよ

かく





を破るとやまとひしわふ
用べるがうれはほじ
○繫ねりてふるやまき
あのうのな三味あすひ
すらんみよによべー
○おやがうめうがいを
たまんの珍とおれきを
希に包みうきてう
○にぎふくのうの珍と
おもそとほほんの珍と
ある日は長門入を
てひやうひづかみを長
あらじれよおまなてさ
といひことせきわく
六月をすすむ





のひとおつきなら
ひとておもべ
。ひく櫻乃実とば
けと桜とつむる事
〇あそへ六月にあそびと
さうあらわすがと石灰
ことくめせにぎみれ
がひくのうのうへ
りら木とまをこうけ
とくはんとゆだふて
えきよのくまのくま
とくはんとくま
のからねきくらへ
石灰多敷金をもみ



三住家譲

風

そよぐ
かづか河

志

夕

風

夏の

あさり
水ある。



43949

汝の儀

朝向	夜向	吉	凶
三四日	明六金	吉六金	九日
三日中	朝三水	吉五云	十日
四日	朝六金	夜五云	十一日
五日	叠四水	夜四云	十二日
六日	叠五云	夜四金十日	十三日
七日小	叠四金	夜四金十五日	十四日
八日	叠五云	夜九云十日	十五日

干儀

朝向	夜向	吉	凶
三四日	明六金	吉六金	九日
三日中	朝三水	吉五云	十日
四日	朝六金	夜五云	十一日
五日	叠四水	夜四云	十二日
六日	叠五云	夜四金十日	十三日
七日小	叠四金	夜四金十五日	十四日
八日	叠五云	夜九云十日	十五日

朝向	夜向	吉	凶
三四日	明六金	吉六金	九日
三日中	朝三水	吉五云	十日
四日	朝六金	夜五云	十一日
五日	叠四水	夜四云	十二日
六日	叠五云	夜四金十日	十三日
七日小	叠四金	夜四金十五日	十四日
八日	叠五云	夜九云十日	十五日

明和四年亥九月
画工 小尾雪坑齋
雕刻 蘿村善右衛門
書林 段食庵九兵衛
大坂本多樓もと丁目



大吉

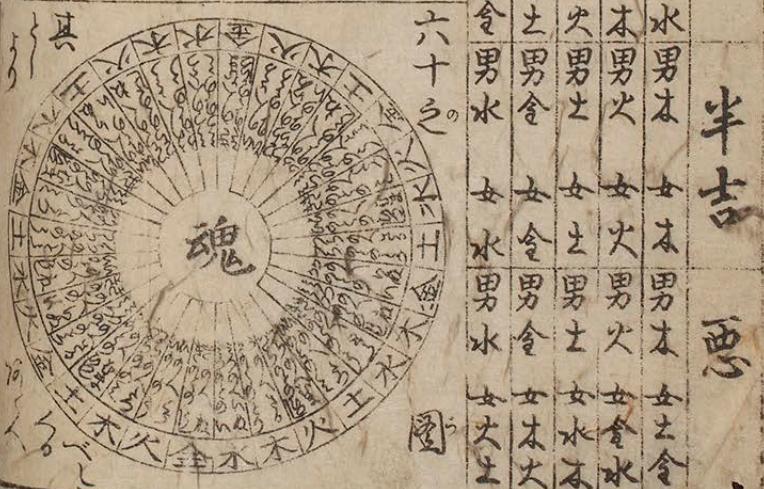
半吉

惡

男 女 相 生

男本 女火水 男本 女本 男本 女土令
男火 女土本男火 女火男火 女令水
男女 女令火男火 女土男子 女水本
男令 女水土男令 女令男令 女本大
男冰 女本令男冰 女水男冰 女大生

守 売 爪 亂 六十之







x-rite ColorChecker® Color Rendition Chart